ふて。」
「ハイ、今日はあゝして芝居迄見せて貰ふて、國への土産は出來たで、去ねと云ひよれば、去なぬ事はないが、此處の御寮人には御妹ごぜが無い筈ぢやが……」
「それが一人丈け有るのや」
「有るか知らんが、わしついぞ聞いた事がないでのう。」
「そら別に云ふて必要のない事やで仰有らんが一人丈け有るのや、私しの頼みや、諾と云ふて、諾と云ふて。」
「番頭さん、お前怪態な人ぢやナ。」
「なんでやね。」
「最初、私しが來よつた時にも、お前が去ね去ねと云ひよつた。又今日も去ね〳〵と云ひよる。お前去ね〳〵に掛つとるかい。」
「そんな物に掛るかいナ。」
「いや、そうぢやなからう。お前、わしの留守中、な……に……か……見たか……番頭さん。……お前わしの留守中……なにか……見……た……か……」（鐘）
「ア……ハ……ハハハハ、みゝゝ見た、みたみた。どうぞ命ばかりは、助けて、見たのは私一人や、どうぞ命ばかりはハ、……。」
「お前何處へ行くか、動けるなら動いて見よ。」
「お前のやうな、甚い力で持たれたら動く事が出來へん。何卒、命ばかりは助けて。」
「左様か……お前、あれを見たか……。見られた上は是非がない。いまわしの言ふ事を一ト通り聞いとくれ、こう云ふ譯ぢや（鐘、下座合方）わしの父さんはのう、百姓副業の山獲師、生き物の命を奪るのは惡い事ぢやと度々、意見はしたれど、父さんは聽いては呉れず、親の因果が子に報ひ、人様の可愛がる猫と見れば、矢も楯もたまらず、人の寢靜まつたのを幸ひに、二重三重の閉りを越え、其猫をとつて、生血を吸ふのが私の病ひぢや、決して人の命を取らうと言ふ様な者では御ざんせん、此後はきつと慎みます、たしなみます、どうぞ今迄通り、置いとくれ、この通り、拜みます、この通りぢや」
「エ、、そんならお前、猫取りか、そんならそうと云ふて呉れたら、こないに吃驚しやへんがな。しかし百姓副業の山獲師と云ふたがお前の國は何處やね。」
「ハイ、海田でがんす」
「ナニ、カイグ、カイグと云ふと何所やね。」
「解らん人ぢやな——藝州の事ぢや。」
「藝州か、あゝそれで、猫をかじるのぢや。」